

「高峰原妙禪師の公案工夫」覚書

田中寛洲

はじめに

元代の禪僧である高峰原妙禪師(1238-1295)は、かの中峰明本國師の嗣法の師として知られている。だが、三年の「死限」を立てて取り組んだと伝えられるその修行時代の刻苦の卓拔さと、石洞に「死関」と榜して居室とし大衆を接待したその峻嚴振りとは、歴代の祖師方と比較しても一頭地を抜いている。殊に、白隠禪師が珍重された『禪関策進』には、高峰禪師に関する幾多の芳躅が載せられているので、修行時代にそれに感化され発憤した人達もさぞかし多いに相違ない。かの芭蕉翁もよほど禪師に私淑していたものと見えて、那須の雲巖寺に立寄った際に、先師仏頂和尚の山居跡を見て、「妙禪師の死関」を連想したと『奥の細道』で述べている。

高峰禪師の語録は、寔に雲棲株宏がその序で述べているように、「此の事を参究するに最も精銳を極むるは、師に逾ゆる者無し。真に純鋼を鑄り就すに似て、一回展読すれば一回人の意気を激発し、踴躍淬礪して倦むことを忘れしむ」の感がある。「此の事」とは何か。それは「仏法の一大事」乃至「生死の一大事」であり、更に限定して言えば、「公案工夫の真髓」ということであろう。語録の二十六丁裏から始まる「禪人に示す」という一群の垂示には、「此の事」という表現が頻出するが、それはまさしく、この格外の名僧が、刻苦精勵して体達し

た境地から、公案工夫に依る真の禪的境涯への道筋を学人に提示された貴重な法材であるといつてよい。

以下の拙論は、「高峰原妙禪師の公案工夫」の實際を、能う限りその語録に即して述べたものである。高峰禪師の行状や法語の詳細が一般に紹介されたことを寡聞にして知らないもので、ここでは師自身の法語などをそのままの形で書き下してご紹介することにした。その為に引用が多くなり、所謂「学問的研究」とは言い得ない形を採ったことをご寛恕願いたい。「覚書」と付記した所以である。

ただ、西洋哲学の理論的究明に飽き足らずに実参実究を目指して出家した筆者の関心は、第一義的には、言句の解釈や事歴等の詮索という学問的研究にはない。釈尊の「毒矢の譬え」や臨濟禪師の「濟世の藥、表頭の説」の示衆にもある通り、「学道」の實踐こそが最重要であるというのが筆者の見解である。殊に、禪宗史上でも稀に見る精進幢であつた師の如き名僧の行履を学ぶには、学問的論究は必ずしも不可欠ではあるまい。この「覚書」が実参実究底の方々に些かでも資する処があればと願うのみである。

(なお以下の拙論に於て使用した高峰禪師の語録は、禪文化研究所蔵・石翠文庫旧蔵の、元禄年間に刊行された丹波高源禪寺蔵版の『高峰大師語録』であり、引用した頁数もこの書のものである。他に中国清代の光緒二年版も参照した。)

一 行状

先ず初めに、語録末尾の「行状」や法語などを参照しながら、高峰禪師の行状に就いて述べてみたい。師は江蘇省呉江の人で、俗姓は徐氏、母は周氏と言つた。僧が舟に乗つて投宿した夢を見て、母が身ごもつたという。南宋理宗皇帝の嘉熙二年(1232)三月二十三日の生まれであつた。襁褓を離れたばかりで跏趺坐を喜び、僧

が門に入つて来るのを見ると、愛恋して僧の後を追わんとしたと伝えられる。

十五歳にして父母に懇請して遂に出家し、密印寺の法住の弟子となつた。十六歳で薙髮、十七歳で具足戒を受け、十八歳で天台の教えを学び、二十歳で禪宗に転じて、淨慈寺に入つて「三年の死限を立して」禪の修行に励んだ。これは「三年以内に見性できなければ死ぬ」という決死の覚悟である。師がそのような類い稀なる決心を立てるに到つたのは、恐らくは、教学を真摯に学ぶことに依つて、教外別伝の宗旨の体得の必要性が明確に自覺されて来たからであると思われる。或いは釈尊が直面されたような、全存在を賭して解決せねばならぬ「生死の一大事」に逢着されていたのかも知れない。いずれにせよ、本格的道場に入る前の、師匠に仕えたこの六年間の予備的期間に於ける、師の沙弥時代の知られざる研鑽に思いを致すことを、我々は忘れてはならない。

淨慈寺に於けるこの決死の修行の最中、師は尋訪した父兄にも相見えなかつたというが、諸縁を放下した師の工夫三昧の日々の充実が伺える逸話である。二十二歳で師は断橋妙倫禪師（嗣無準師範）に請益して、「生は何れ従りか来たり、死して何くに従つてか去る」の話題に渾身を以て参究した。「行状」では「脇席に至らず、口体俱に忘す」と、その工夫が純熟した様子を述べている。廁へ行つて肌着になつて出て来たり、函を開いて閉じるのを忘れて去つたなどという行為は、確かにその様に思われる。ただ、師自身は、当時「意が兩路に分かれて、心が一に歸せず」、一年有余「毎日只箇の迷路の人の如くに相似たり」（四十三丁裏）とも述懐しているで、必ずしも真箇大死一番底の佳境に入り得た訳ではあるまい。しかも、「那時、三年の限に逼られるに因つて、正に煩惱中に在り」（同上）と、自ら立した「死限」によつて切迫感を受けて苦悩していたことを正直に吐露している。師の如き越格底の禪僧にして、なお微細の分別心を尽くせず、純一無雜なること能わざりしこと、まさに斯の如くである。「此の事」を参究することの実に容易ならざることがよく分かる。

そして「台州の淨兄」なる道友の説示により、北磻の塔頭に寓していた雪巖祖欽禪師に請益したが、門訊するに際して「一頓の痛棒」をもつて打出されて門を閉じられ、涙を流して退いたという。何度も通つてようやく親近することができた。かくして、師は雪巖禪師に参じて、先ず最初に無字の公案を与えられ、これより「参扣すること虚日無し」「行状七十三丁裏」というほど工夫に精進した。だが雪巖禪師は、師が入室するたびに、「阿誰か你が与に箇の死屍を拖き来たる」と畳み掛け、その問いが終わらぬうちに「痛棒を以て打出す」という峻厳な接得の仕方を罷めなかつた。「是の如き者、其の幾ばくかを知らず」と師は述懐している。これは言うまでもなく、稀に見る上根の学人であつた師に対して、何とか分別をこそげ落として絶対絶命の窮地に到らしめようとする、雪巖禪師の徹困親切な大悲心の発露に他ならない。

雪巖禪師が南明に赴くに際して、師は径山に帰堂したが、そこで師は期せずして夢の中で、以前に断橋禪師より授けられた「万法帰一」の公案に取り憑かれた。そして「疑情頓に発して三昼夜睫交わらず」（七十三丁裏）、「疑情頓に発して打成一片、直に得たり、東西弁ぜず、寢食俱に忘ずることを」（四十四丁表裏）という、正に「大疑現前」の佳境に覺えず没入したのである。これまで決死の覚悟で工夫三昧の精進をしていたにも拘らず、真箇の大死一番底の境地に入り得なかつた師が、何故に今回はそれが可能となつたのであろうか。それは恐らく、以前は、師の言う「能為の心」（六丁表）を随伴した意識的な拈提であつたが、この度は、謂わば計らい無しに夢中で公案が現前し、期せずして三昧が醸成されたので、極く自然に「無心三昧」に入ることが可能と成つたからであると思われる。まさしく「別に工夫無し」の好箇の模範である。

こうして通身是れ疑団になつていた師は、それから第六日目の達磨大師の少林忌に際して、殿閣上で諷經した折りに、五祖法演禪師の真讚の「百年三万六千朝、返覆すれば元来是れ遮の漢」という末後の両句を見て、図らずも心華を開発する。「日前老和尚の所問せらる死屍を拖くの句子、豁然として打破す。直に得たり、魂

飛び胆喪することを。絶後に再び甦つて何ぞ當に百二十斤の担子を放下するのみならんや。乃ち是れ辛酉三月廿二、少林忌の日なり。其の年恰も廿四歳、三年の限を満たす。」(四十四丁裏)と、「仰山雪巖和尚に通えて疑れ嗣ぐの書」の中で、この間の消息を師は述べている。

疑団を打破して自性を徹見した師は、最早昔日の「呉下の阿蒙」ではない。「夏を解いて南明に詣る。欽一見して便ち問う、阿誰かあなたが与に箇の死屍を拖き来たと。遮裏に到つて師便ち喝す。欽棒を拈ず。師把住して云く、今日某甲を打つことを得ざれ。欽曰く、甚麼と為てか打つことを得ざる。師払袖して便ち出ず。翌日欽問う、万法一に帰す、一何れの処にか帰す。師云く、狗が熱油鏝を舐る。欽曰く、你那裏より遮の虚頭を学び来たる。師云く、正に和尚の疑著せんことを要す。欽休し去る。是れより機鋒譲らず。」(七十三丁裏、七十四丁表)と、「機に臨んで師に譲らず」という底の痛快な力量を発揮するに到つた。

その後、師は希叟紹曇禪師(嗣無準師範、『五家正宗贊』の著者)に参じた。「旦過に寓す。曇問うて曰く、那裏より来たる。師、蒲団を放下す。曇曰く、狗子仏性、你作麼生か会す。師云く、大家を抛出して看よ。曇自ら送つて帰堂せしむ。」(七十四丁表)と行状にあり、希叟禪師が師の作略を肯つた有様が看取れる。

雪巖禪師が天寧に道場を開くに及んで、師も随侍して服勞した。

「一日欽問う、日間浩浩の時、還主と作り得んや。師云く、主と作り得ん。又問う、睡夢の中、主と作り得んや。師云く、主と作り得。又問う、正に睡著の時、無夢無想無見無聞、主甚麼の処にか在る。師無語。欽囑して曰く、今日より去、也汝が仏を学び法を学ぶことを要せず、也汝が古を窮め今を窮めることを要せず。但只饑え来たらば飯を吃し、困じ来たらば打眠せよ。纔に眠り覚め来たらば、却つて精神を抖擻せよ、我が遮の一覺の主人公、畢竟甚麼の処に在りてか安心立命せん」と。(七十四丁表)

師の刻苦は更に続いた。「信得及して此の語を遵守すと雖も、奈せん資質遲鈍にして転見て明らめ難し。遂

に龍鬚の行有り。即ち自ら誓つて云く、一生を棄てて個の癡駄の漢と做つて、定めて遮の一著子を見ること明白ならんことを要すと。経て五年に及んで一日庵に寓して宿す。睡り覚めて正に此の事を疑う。忽ち同宿の道友、枕子を推して地に墮ち、声を作す。蓦然として疑團を打破すること、網羅の中に在つて跳出するが如し。日前に疑う所の仏祖誦詁の公案、古今差別の因縁を追憶するに、恰も泗州に大聖を見て、遠客の故郷に還るが如し。元来只是れ旧時の人、旧時の行履の処を改めず。此れ自り邦を安んじ国を定め、天下太平、一念無為にして十方を坐斷す。(四十五丁表)

だが、師はこれで刻苦を罷めた訳ではない。「行状」には、

「龍鬚に在ること九年、柴を縛して龕と為し、風穿ち日炙り、冬夏一衲、扇せず爐せず、日に松を搗いて麤に和して延息するのみ。嘗て積雪の龕を没すること旬余、路梗がり煙火を絶す。咸く謂う、死せりと。霽れて入るべきに及んで、師正に那伽に宴坐す。」と、悟後の凄まじき修行の有様が述べられている。

甲戌(一二七)、師が武康の双髻峰に移るに及んで、学徒が雲集した。庵が狭小であつたので、学徒の優秀なる者達を選抜して修行させることにした。ところが、丙子(一二八)春、時恰も南宋が滅亡せんとする時節に当り、兵乱の為に学徒は四方に散じ去つた。「師独り関を掩い、危坐して自若たり」と「行状」は伝えている。危難が去つて戸を啓いて見れば、師はかの雪中の時と同様の大禪定に入つておられた。しかし、また前にも増して夥しい学徒が雲集したので、師はそれを厭い、双髻峰を去つて遂に西天目山に到るのである。

「己卯(一二七)の春、腰包して宵遁す。直に天目造る。西峰の肩に獅子巖有り、地を抜くこと千仞、崖石林立す。師之を楽しんで終焉の意有り。弟子法昇等追尋して繼いで至る。為に茅を葺き頭を蓋う。未だ幾ばくならざるに麤を募るの蟻復集まる。師乃ち巖西の石洞に造りて小室を営むこと舟の如し。従は丈を以てし、衡は之を半ばにす。榜するに死関を以てす。上は溜り下は渾み、風雨飄揺す。給侍を絶ち服用を屏け、身を潔わず髪

を離らず、甕を截つて鎗と爲し、日を併せて一食なるも晏如たり。洞は梯に非ずんば登ること莫し。梯を撤せば縁を断つ。弟子と雖も瞻視を得ること罕なり。

乃ち三関の語有り、以て学者を驗す。云く、大徹底の人、本生死を脱す、甚に因つてか命根不断なる。仏祖の公案即ち是れ一箇の道理、甚に因つてか明と不明と有る。大修行底の人、当に仏行に遵うべし、甚に因つてか毘尼を守らざる。儼し下語すれども契わずんば、遂に門を閉じて接せず。大根を具し大志を負うに非ざるよりは、崖を望んで退かざるもの鮮し。」(七十五丁裏)

寔に孤危險峻比類なき行履であり、大衆接待である。

當時、仰山に住山した雪巖禪師が師を喚び寄せようとしたが、師は遂に西天目を起つことはなかった。雪巖禪師自身が師を来訪して、「竹篋塵垢及び緑水青山同一受記の語」を授けた。師は「懷中の弁香、始めて人天の前に拈出」した。これより「道風の届く所、日に益遠し。遂に他方異域、重海を越え万山を踰えて来たる者有り。」然しながら、師はほどなくして遷化することになる。「行状」では師の末後を次のように伝えている。

「師、胃疾を患うこと已に数年。然れども起居飲食、人を待し物を接すること、皆未だ嘗て廢せず。乙未(二二〇)十一月二十六日、祖雍が明初と偕に來り師を省す。師竟に末後の事を以て付囑す。遂に兩つの真軸を取りて二つの讃を口占し、乃ち之を書す。十二月初一日黎明、衆を辞して云く、西峯三十年、妄りに般若を談じ、罪犯天に弥し、末後一句子有り、敢えて、平人を累及にせず、自ら領じ去らん、大衆還落処を知る者有りや、良久して云く、毫釐も差有れば天地懸隔すと。衆皆哀慟して已まず。辰巳の間に至りて偈を説いて曰く、来たつて死関に入らず、去つて死関を出でず、鉄蛇海に鑽入して、須弥山を撞倒すと。泊然として寂す。龕を啓くこと七日、端然として生けるが如し。縑素の弁り哭する者填咽す。越えて二二日庚申、全身を死関に塔す。遺命に遵うなり。寿五十八、臘四十三。弟子僅かに百人、毘尼を受け及び請益する者、数万人。示寂の後、遠邇の人、顔を承け

て誨おしえを領うけすることを得ざるを恨んで、塔前に慟哭たうこくす。頂うへを然しかき臂うでを煉やく者、猶しやう憧憧しやうしやうとして絶えず。」

二、工夫の病源

師は、自らの工夫がなかなか純熟しなかつた「病源」を「杭州西天目山師子禪寺法語」の中で詳細に披歴ひれきしている。

「前さきに看る所の無字、將まさに三載さいに及ばんとす。二時の粥飯を除いて曾て蒲団に上らず、困ずる時も亦倚靠いこせず。則ち昼夜東行西行すと雖も、常に昏散の二魔と輓なして一団と作り、伎倆ぎりやうを盡つくくして打屏だひやうすれども去らず。遮さの無字上に於て竟つひに曾て一餉かうの間の省力も有らず。成片自決の後、其の病源を鞠くるするに、別に他無ほかし、故は只疑情の上に在つて工夫を做なし、一味に只是れ拏なせざるが為なり。拏する時は即ち有るも、拏せざれば即ち無し。設たとい疑いを起さんと要するも、亦手を下す処無し。設たと使手を下し得て疑い得去るも、只頃刻けいこくの間のみ。又未だ昏散に打せられて両櫂りやうけつと作なすことを免れず。是こゝに於て空しく許多の光陰を費やし、空しく許多の生受しやうじゆを喫くして、略些はほ子の進趣無し。」（六丁表）

雪巖禪師にもらつた無字の公案を渾身で参究したが、遂に「食事をする短時間ほどの省力（計らいを絶した境地）」も育つことはなかつた。内外打成一片の三昧境を経て決定心けつじゆうしんを得た後、病源を究明してみると、疑情がありながら工夫專一になれなかつたことが光陰を空費した理由であるということが分かつたのである。疑いを起し難く、たとえ疑いを起しても「昏散」に襲われて心が二つに分かれ、純一になれなかつたというのは、分別心のなせるわざである。疑いが凝結して疑团となり、人境俱に忘ずる大死底に至つて初めて分別心が尽きるのである。しかしそれは、そうしようと思つて出来るものではない。

白隠禪師が「隻手の音声」の公案を創始されたのが、「無字」に比して「疑情が起こり易い」という理由からであつたことは、周知の通りであるが、高峰禪師もまた、無字と較べて「一掃何処」の公案は、疑情を發し易く、拈提に際して分別が入りにくい、という点を強調しておられる（六丁表）。そして続けてこの疑情から心華開発の時節に至る妙境を、次のように記されている。

「纔に疑情有りて稍稍成片せば、便ち能為の心無し。既に能為の心無くんば、所思即ち忘じて、万縁をして息まずして自ずから息ましめ、六窓をして静ならずして自ずから静ならしめんことを致して、纖塵を犯さずして頃に無心三昧に入る。」（六丁表）。

この、所思即ち忘じて「万縁をして息まずして自ずから息ましめ（使万縁不息而自息）」ということが、殊に重要であろう。疑情があれば思わず知らず次第次第に内外打成一片となり、こうしようという計らいの念は消え失せてしまう。そうなれば、思慮分別は絶え果て、空じようとせずとも自然に万縁が空じられ、六識の感官能力も「見て見ず、聞いて聞かず」という、有つて無きが如き空空寂寂の処に自ずから没入する。そうすれば、図らずして頃に「無心三昧」に入ることが出来る。ここで師が大悟の境地を「無心三昧」と呼んでいるのは注目値する。

「修行上の病」に就いて、師はまた次の如き興味深い垂示をしている。「兄弟家、十年二十年以て一生に至るまで、世を絶し縁を忘じて単に此の事を明らむるも、透脱せざることは、病何くにか在る。自分の衲僧試みに拈出して看よ。是れ宿に靈骨無きこと莫きや。是れ明師に遇わざる莫きや。是れ一暴十寒なること莫きや。是れ根劣にして志微なること莫きや。是れ塵勞に汨没すること莫きや。是れ沈空・滯寂なること莫きや。是れ雜毒の心に入ること莫きや。是れ時節未だ至らざること莫きや。是れ言句を疑わざること莫きや。是れ未だ得ざるに得と謂い、未だ証せざるに証すと謂うこと莫きや。若し膏肓の疾を論ぜば、総に遮裏に在らず。既に遮裏

に在らずんば、畢竟甚麼なんの処ところに在る。咄。三条椽てんか下・七尺単前。」(二八丁表)

師が雲衲達に向かつて、「修行者仲間の雲衲方よ、十年二十年或いは一生かかつて世縁を放下してひたすら此の事の究明に努めているにも拘らず、真の透脱を得ることが出来ないのは、一体如何なる病があるのでしょうか。具眼底の衲僧ならば、試みに申して見よ」と尋ね、自ら答えて曰く、「それは、もともと我が身に非凡な天性がなかったからではないか。それは、明眼の師に遇うことがなかったからではないか。それは、植物を一日太陽の光りに暴きざして十日間も暗い所に置くと『孟子』にあるように、一日修行しては十日懈怠したからではないか。それは、少根劣機にして道心が足らなかつたが故ではないか。それは、煩惱の塵によつて心を徒いそに勞することに浸り切つていたからではないか。それは、空寂の境地に尻を据えてしまったからではないか。それは、執着心や有所得心などの雜毒が心に入つて来たからではないか。それは、骨を折つてはいるが時節因縁が未だ熟さないからではないか。それは、言句話頭・公案を疑うことがないからではないか。それは、未だ得ておらぬ境地を得たと言ひ、未だ証悟しておらぬのに証悟したと言つてゐるからではないか。」

師はこのように如何にも修行者達が述べそうな理由を列挙した後に、こう結んでゐる、「もし修行者の膏肓の疾（不治の病）は何かということならば、今述べたことのいづれにも原因があるのでもない。今述べたことではないとすれば、畢竟どこにその根本原因があるというのか。咄。三条椽てんか下・七尺単前。」「三条椽てんか下・七尺単前」とは『碧巖錄』第二十五則にも見える句で、禪堂で雲衲が坐禪する單のことであり、また單上から見た眼前の光景である。師の本意は、「四の五の弁解せずに、分別を根こそぎにして死地に入る程の坐禪に励んでこい。坐り様・死に切り様が足らぬわい」ということであろうか。或いは「三条椽てんか下・七尺単前」、只這之ただこれということか、いづれにしても師の腕力を示す垂示である。

「病」に關して今ひとつ師の説法を取り上げたい。師は言う、「兄弟家ひんていけ、十年二十年の撥草瞻風はつそうせんぷうを成して仏性

を見ざれば、往往に皆謂う、昏沈掉挙に籠罩せられることを被ると。殊に知らず只遮の昏沈掉挙の四字、当体即ち是れ仏性なることを。嗟するに堪えたり。迷入了せずして妄りに自ら法に執して病と為し、病を以て病を攻む。仏性をして愈求めば愈遠く、転急なれば転遅からしむることを致す。設使一箇半箇回向返照して直下に非を知り、廓然として薬病両忘し、眼睛露出し、達磨单伝を洞明し、本来の仏性を徹見するも、若し西峰が点検し將ち来たるに抛らば、猶是れ生死岸頭の事なり。若し向上の一路を曰わば、須く更に青山の外に在ることを知るべし。」(三二丁裏)

修行者達は往々にして皆、長年行脚歴参しても自己本有の仏性を徹見できぬのは、心が沈んだり散乱したりする状態に陥つたせいであると言う。だが、かかる心の有様も、実はその当体は仏性そのものに他ならないのを彼らが知らないのは、寔に嘆かわしいことである。仏性を具有しているにも拘らず、自らを病と思い込み、法を彼方に求める修行者が多いが、それこそは「病を以て病を攻める」が如き愚行であり、仏性を外に向かつて求めれば求める程、益々仏性から遠ざかることになる、と師は喝破されるのである。これは報恩玄則禪師が法眼文益禪師の竹篋下で大悟の機縁となつた所謂「丙丁童子来求火」(火の神が火を求めて来る)ということである。だが、それを指摘するだけで留まれば、師も越格の名僧と言うことは出来ぬ。「設使一箇半箇回向返照して直下に非を知り、廓然として薬病両忘し、眼睛露出し、達磨单伝を洞明し、本来の仏性を徹見するも、若し西峰が点検し將ち来たるに抛らば、猶是れ生死岸頭の事なり。若し向上の一路を曰わば、須く更に青山の外に在ることを知るべし。」という一段があつてこそ、師の面目躍如たるものがあると言うべきである。一箇半箇の真正参禅底の柄子がいて、従前の非を知り、外に向けていた眼を回向返照して自己の本源に向かつて驀直に参究して本有の仏性を徹見したとしても、この山僧(西峯)の正眼に見来れば、なお「生死岸頭の事」である。「向上の一路」は、更にかかる見性底の境涯をも空し尽くして初めて得べきものである、と師は説くのである。

以上、「工夫の病源」に就いての師の見解を取纏めると、余計な分別心を起して工夫專一ならず疑情に隙がでると、大死一番が不可能となり、光陰を空費することになる。眼を外に向けず、昏散を病と見て仏性を彼方に求めることなく、ひたすら自己の本源に廻向返照して、話頭を疑着して專一に工夫することに依り、図らずも分別心が自ずから脱落して「無心三昧」の妙境に入るが、その無心の境地にも尻を据えてはならぬ、ということになるであろう。

それでは、かかる病源を克服して大悟徹底された師の「真正の公案工夫」に就いての見解とは如何なるものであろうか。我々は次に師の卓拔な法語の数々を見て行かなくてはならない。

三、公案工夫

師の大悟の境地から唱え出された法語は、いずれも格調が高いが、その内の幾つかをご紹介したい。

「若し此の一段奇特の事を論ぜば、人人本具・箇箇円成、拳を握り掌を展ぶるが如く、渾て纖毫の力を犯さず。祇心猿擾擾・意馬喧喧たるが為に、三毒無明を恣縱し、妄りに人我等の相を執して、水を氷に澆ぐが如く、愈濃厚を加え、自己の靈光を障却し、決定して現ずることを得るに由無し。

若し是れ生鉄鑄り就す底の漢にして、的実に明らめんと要せば、亦造次に非ずして、直に須く大志を発し大願を立て、心猿意馬を殺却し妄想塵勞を断除すべし。急水灘頭に在りて舟を泊むるが如くに相似たり。危亡・得失・人我・是非を顧みず、寝を忘じ食を忘じ、思を絶し慮を絶し、昼三夜三、心心相次し念念相続し、脚頭を踏定し、牙関を咬定し、牢牢として繩頭を把定し、更に絲毫の走作を容れず。仮使人有りて、あなたが頭を取り、あなたが手足を除き、あなたが心肝を剝り、乃至は命終るとも、誠に捨つべからず。遮裏に到りて方に少分の工夫を做

すの氣味有り。

嗟乎、末法聖を去ること時遙かなり。多くは一等泛泛の流有りて、竟に悟門有ることを信ぜず、但只遮辺に向かいて穿鑿し、那辺に計較す。直饒計較し得成し穿鑿し得就すとも、眼光落地の時、還用得著せんや。若し用得著せば、世尊雪山六年・達磨九載・長慶七箇の蒲団を坐破し、香林四十年方に一片を成じ、趙州三十年雜用心せざるも、何ぞ須いん、許多の生受を討ねて吃すること。

更に一等有り、十年二十年工を用ゆることを成して、曾て箇の入処有らざる者は、只他が宿に靈骨無く志堅固ならざるが為なり。半信半疑、或いは起き或いは倒れ、弄し来たり弄し去る。世情は転転に純熟し、道念は漸漸に生疎なり。十二時中、一箇の時辰も把捉得定し打成一片なること有難し。遮般底に似たらば、直饒弄して弥勒下生に到るも也甚麼の交渉か有らん。

若し是れ真正本色行脚の高士ならば、肯えて胡乱にせず。打頭便ち箇の作家を尋ねて纔に一言半句を拈著するを聞いて、更に擬議せず、直下に便ち恁麼に信得及し作得主し把得定して、孤迥迥峭巍巍・淨躑躑赤洒洒、更に危亡得失を問わざらんことを要す。只恁麼に推し將ち去つて驀然として繩斷して吃顛し絶後に再び甦らば、他の本地の風光を看ん。何れの処にか更に仏を覓めん。又、一偈有り、大衆に拈示せん。

急水灘頭に小舟を泊む、切に須く牢く遮の繩頭を把るべし。驀然として繩斷せば回避し難し、直に得たり通身に血迸り流るることを。」(二八丁裏)

「此の一段奇特の事」を論じたこの垂示の劈頭は、「工夫の病源」の箇所で挙げた、自信不及の故に自家屋裏の無価の珍宝を忘却して仏性を外に求めて心を散乱させる、という最後の病と関連する。

師は言う、「仏法の特に卓絶している所以を言うならば、仏性は誰しも本来具有しているもので、如何なる人でも円満に仏性を既に成就していることは、ちやうど拳を握り掌を開くが如くに似て、すべて些かの努力も

要しないほどである。ただ心に雑念が生じて意馬心猿の乱れを生ずるが故に、貪瞋癡の三毒や無明を恣縦にし、誤つて人我（実体化された自我）などの相に執着して、水をそそげば氷が益々厚みを増すが如くに、自己の靈光（自己が本来具有する靈妙な光明）を遮つてしまひ、その靈光が顯現することができず手立てが決定的に閉ざされてしまふのである。」

この一段の宗旨は、古来幾多の名僧が披歴してきた確固たる體驗的眞実である。例えば、馬祖道一禪師は大珠慧海禪師に対して次の様に直指して大悟に到らしめている。「大珠初めて祖に參ず。祖問うて曰く、何処從り來たる。曰く、越州大雲寺より來たる。祖曰く、此に來たつて何事を須いんと擬す。曰く、來たつて佛法を求む。祖曰く、自家の宝藏を顧みず、家を抛つて散走して什麼をかく作す。我が遮裏には一物も也無し、甚麼の佛法をか求めん。珠、遂に札拝して問うて曰く、阿那箇か是れ慧海が自家の宝藏。祖曰く、即今我に問う者、是れ汝が宝藏なり。一切具足して更に欠少無く、使用自在なり。何ぞ外に向かつて求覓することを仮らん。珠言下に於て自ずから本心を識り、知覺に由らず。踊躍礼謝す。」（『五燈全元』卷三）

高峰禪師の言わんとするのも、この馬大師の説示・活作略と同じ趣旨であることは言うまでもない。

師は劈頭の一段に續けて、本来有るべき工夫の仕方を次の様に挙示する。「もし混ざり物のない純鉄で鑄造した如くに道心堅固の鉄漢がいて、この一大事を確と明らかにしたいと願うならば、直ちに大志を發し大願を立て、心の惑亂を退け妄想・分別を断ち切らねばならぬ。それはちやうど危険な早瀬の只中で舟を留めるのに似ている。危亡・得失・人我・是非を顧みずに、寢食を忘じ、思慮分別を絶して、昼となく夜となく参究して、心念を途切らすことなく相統し、足場をしつかりとし、奥歯を嚙みしめて、舟のとも綱を捉えて緩めることなく、微塵の余所見もしない。もし誰か人がいて、汝の頭を切り取り、汝の手足を切り落し、汝の心臓や肝臓をえぐり取り、そのために命が尽きることになろうとも、とも綱を捨ててはならない。そうしてこそ、まさに本

格的な工夫をしていると呼べる風情が些かあるというものである。」

ここで師は、「大志」と「大願」の必要性と、決死の覚悟で間断無く公案工夫に参すべきことを力説して居られる。寔に凄まじき工夫の挙揚であるが、多少なりとも工夫に間隙ができればすぐに妄想・分別が入り込むことになるということを体験的に知悉しているからこそ、親切なご垂誡であろう。命を擲つての工夫でなければ、真の禅定に入ることとは困難である。

故に、師はそれに引き続き、嘆いて言われる、「ああ、末法の現代は釈尊が遷化されてから遙かに時が経つてしまっている。修行僧の多くは浮ついた類いの者達で、禅に悟りへの入り口があることを信じていることなく、只ひたすらこちらでは分別を逞しくし、あちらでは計らいをなす。たといそうした計らいや分別を為し得たとしても、臨終の時節が来れば、そんなものは何の役に立つであろうか。…(中略)…更にまた、十年二十年と工夫に打ち込んでいるにも拘らず、一向に悟りに到達できない者がいるが、それは只彼が元来非凡な天性もなく道心堅固でないがためである。信じたり疑つたり、工夫をしたりしなかったりで、妄想を恣にしている。俗情は次から次へと純熟して、道念は次第次第に親密でなくなる。四六時中僅かの時間ですらも公案にしつかり取り組んで打成一片になることなど到底できない有様である。この様な体たらくな輩は、たとい工夫をして五十六億七千万年後の弥勒下生に到ろうとも、断じて真の禅的境地とは没交渉である。」

それでは真箇の工夫は如何にすれば成就できるのか。この一段の垂示はその喫緊の処を拏示することによって結ばれている。

「もし自分の事を主眼として取り組む真正の行雲流水底の高邁な衲僧ならば、決していい加減にせず、明眼の善知識を尋訪して、その老師が一言半句を挙揚するのを聞くやいなや、何ら躊躇することなく、老師の言われるがままを直下に信じ切つて公案を手放すことなく、他に影響されることなく孤絶にして屹立し、寸糸も掛

けぬ洒々落々の境地で、命を失うことも工夫の当否を顧みることもないようにしなくてはならない。只かように工夫を持続し、突如として繩が切れて躓き倒れ（大死一番して）、絶後に再び甦るならば、彼の本来の風光を看ることであろう。それ以上一体何処に仏を覓めようとするのか。」

ここで師が指摘された重要な点は、明師に就くということと、その教導に任せ切つて大死一番絶後再蘇まで決死の覚悟で工夫するということである。明師に関しては、道元禪師も『学道用心集』の中で、「参禅学道は正師を求むべき事」という一条を設けて、後進の為に次の如く説いておられる。「古人曰く、発心正しからざれば万行空しく施すと。誠なる哉此の言。行道は導師の正と邪とに依るべきか。機は良材の如く、師は工匠に似たり。縦い良材為りと雖も、良工を得ざれば奇麗未だ彰れず。縦い曲木と雖も、好手に遇わば妙功忽ち現ぜん。師の正邪に随いて悟の僞眞の有ること、之を以て曉るべし。」（『道元禪師全集』大久保道舟編 下巻 二五五頁）

明師の言を聞いて、「更に擬議せず、直下に便ち信得及す」とはそれを「真受けする」ということである。道元禪師が、「次第に我執を捨て知識の言に随ひゆけば、精進するなり。理をば心得たるやうに云て、さはさにあれども我は其事を捨るぬと云て、執し好み修するは、彌よ沈淪するなり。」（前掲書 下巻 四三〇頁）と説かれ、盤珪禪師が、「皆身どもが云ふように、身どもが云ふに打ち任せて、身ども次第にして、先づ三十日不生で居て見さつしやい。」（『盤珪禪師全集』二三頁）と説かれているのも、弟子たる者は自らを空しくして善知識の教えを「真受け」し、それに随順して行く事が肝要であると述べられたものであろう。

公案工夫に関する師の法語はいずれも卓抜であるが、次の法語は、参禅に際して具すべき「三要」に就いて述べている点で、欠かす事はできない。

「若し著実の参禅を謂わば、決して須く三要を具足すべし。第一には、大信根有つて、明らかに此の事を知らんことを要す。一座の須弥山に靠るが如し。第二には、大憤志有らんことを要す。父を殺せし冤讐に遇い、

直に便ち一刀兩断を与えんと欲するが如し。第三には、大疑情有らんことを要す。暗地に一件の極事を做し
了つて、正に露れんとして未だ露れざる時に在るが如し。十二時中果して能く此の三要を具せば、日を尅して
功を成ぜんことを管取せん。甕中に鼈を走らしむることを怕れざれ。苟も其の一を闕けば、譬えば折足の鼎の
如く、終に廢器と成らん。然も是の如くなりと雖も、西峰が坑子裏に落在すれば、也救わざることを得ず。咄。」
(三十四丁表)

師はここで、脚実地を踏んだ參禅(禪修行)には大信根・大憤志・大疑情が欠くべからざる「三要」であると説き、
その一つを欠けば足の折れた鼎の如く廢器となるであらうと断言している。

次の法語は、疑団の釀成と大疑現前を経て開悟に至る道程を明確に提示している。

「淨修待者に示す。予仮に此に來たつて二十四年、常に病中に在り、医を求め藥を服して、万般の艱苦を歷尽す。
争か病膏肓に在つて藥の療すべき無きことを知らん。後に双徑に至つて、夢中に断橋和尚授くる所の丹を服す。
第六日に至つて期せずして仰山老和尚に中てらるの毒を觸発す。直に得たり、魂飛び胆喪し、絶後に再び甦る
ことを。當時便ち四大輕安を覺ゆること、百二十斤の一条の擔子を放下するが如くに相似たり。今此の丹を
將つて之を汝に授く。汝之を服せんと欲せば、先ず六情六識・四大五蘊・山河大地・万象森羅を將つて、總に
鎔かして一箇の疑団と作して、目前に頓在せよ。一鎗一旗を仮らず、靜悄悄地にして便ち箇の清平世界に似ん。
是の如くならば、行くも也只是れ箇の疑団、坐するも也只是れ箇の疑団、著衣吃飯も也只是れ箇の疑団、屙屎放
尿も也只是れ箇の疑団、以て見聞覺知に至るまで總に只是れ箇の疑団なり。疑い來たり疑い去り、疑いて省力
の處に至らば、是れ得力の處なり。疑わずして自ずから疑い、拏せずして自ずから拏し、朝より暮に至るまで
頭を粘じ尾を續じて打成一片、糸毫の縫罅無く、撼かせども亦動ぜず、趁えども亦去らず、昭昭靈靈として常
に前に現在し、順水に舟を流すが如く、全く手を犯さず。只此れ便ち得力底の時節なり。」

更に須く其の正念を慙にすべし、慎んで心を二つにすること無し。展転して光を磨し、展転して淘汰し、玄を窮め奥を尽くし、極に至り徹に至り、一毫頭上に向かつて身を安んじ、孤孤迴迴、卓卓巍巍、動ぜず揺るがず、来無く去無く、一念不生、前後際断す。茲従り塵勞頓に息み、昏散勦除す。行けども行くことを知らず、坐せども坐することを知らず、寒けれども亦寒を知らず、熱けれども亦熱を知らず、茶を吃すれども茶を知らず、飯を吃すれども飯を知らず、終日默憇憇地にして、恰も箇の泥塑木雕底に似たるが如し。故に謂う、牆壁と殊なり無しと。

纔に遮の境界現前すること有らば、即ち是れ家に到るの消息なり。決定して他を去ること遠からざるなり。巴得構し、撮得着するなり、只時刻を待つのみ。又却つて恁麼の説を見て一念の精進心を起こして之を求むることを得ざれ。又却つて心を將つて之を待つことを得ざれ、又却つて一念も之を縦にせんと要することを得ざれ。又却つて一念も之を棄てんと要することを得ざれ。直に須く堅く正念を凝らして悟を以て則と為すべし。此の際に當つて八万四千の魔軍有り、汝が六根門頭に在つて伺候し、所有一切の奇異殊勝・善惡心驗の事、汝が心に随つて設け、汝が心に随つて生じ、汝が心に随つて求め、汝が心に随つて現ず。凡そ欲する所有らば、之を遂げざること無し。汝若し毫釐の差別の心を瞥起し、纖塵の妄想の念を生ぜんと擬すれば、即便ち他の圈縲に墮し、即便ち他に主と作られ、即便ち他の指揮を聴し、便乃ち口に魔の話を説き、心に魔の行を行じ、反つて他の非を誹り、自ら真道なりと誉む。

般若の正因茲従り永く泯びて、菩提の種子復芽を生ぜず、劫劫生生常に伴侶と為さん。当に知るべし、此の諸の魔境は皆自心従り起る所、自心生ずる所なることを。心若し起こらずんば、争か之を如何せん。天台云く、汝が伎倆は尽くること有れども、我が采ぜざることは窮まり無しと。誠なる哉、是の言や。但只、一切処冷水氷地にし去り、平妥妥地にし去り、純清絶点にし去り、一念万年にし去らしめよ。箇の守屍の鬼子の如く、

守り来たり守り去つて、疑団子の欸然として爆地に一声せば、天を驚かし地を動ずることを管取せん。之を勉めよ之を勉めよ。」(三七丁裏)

ここで師は、先ず自分自身の体験を掲げ、膏肓の病(生死の大病)を抜本的に癒す方途として、疑団の醸成とその打破とを挙揚している。行住坐臥・見聞覚知を総に「只是れ箇の疑団」とし、どこまでも疑い抜いて、「疑い省力の処に至つたならば、これぞ得力の処である。」

「省力の処」とは何か。それは「疑わずして自ずから疑い、举せずして自ずから挙す」(不疑自疑、不举自举)という、人為や計らいを空じた拈提のことである。工夫するといふ意識も、工夫する自分も、思わず知らず空じられ、痴痴呆呆として「行けども行くことを知らず、坐せども坐することを知らず」という絶妙の佳境に入る。この境界が現前すれば、それは「本分の家郷に近づいた証拠」ではあるが、それで工夫を緩めて「毫釐の差別の心」を起し、「纖塵の妄想の念」を生ずれば、忽ち「魔軍」に付け入られて、遂には「般若の正因」が泯滅し、「菩提の種子」が絶えてしまう。呉々も、疑団を突如として打破して「驚天動地」の時節が来るまで、工夫を守り抜かねばならないのである。ここで師が、工夫が純熟した時にこそ「自心より起る魔境」に対して万全の注意を払わねばならぬ事を力説しているのは、真箇の三昧境に入る事に苦辛した自らの体験を踏まえたものである。

「信翁居士に示す」と題された今ひとつの法語をご紹介したい。「信翁居士に示す。大抵參禪は緇素を分かつたず、但只一箇決定の信の字を要す。若し能く直下に信得及し把得定し作得主して五欲に撼かざることを被らざることを、箇の鉄橛子の如くに相似らば、日を尅して功を成ずることを管取せん。甕中に鼈を走らすことを恐れざれ。豈見ずや、華嚴会上の善財童子の一百一十城を歴て五十三の善知識に参じて、無上の果を獲しことも、亦遮の一箇の信の字を出でず、法華会上の八歳の龍女の、直に南方無垢世界に往いて珠を献じ成仏するも、亦

遮の一箇の信の字を出でず、涅槃会上の広額屠児の、屠刀を颯下して唱えて我は是れ千仏の一数と言うも、亦遮の一箇の信の字を出でず、昔阿那律陀有り、仏に訶せられるに因つて七日眠らず双目を失し去り、大千世界掌果を覩るが如きも、亦遮の一箇の信の字を出でず、復一少比丘有り、一老比丘に戯れて証果の位を与えて、遂に皮球を以て頭を討つこと四下、即ち四果を獲るも、亦遮の一箇の信の字を出でず、楊岐の慈明に参じて監寺に充てしめ以て十載に至り、鼻孔を打失し道を天下に播くも、亦遮の一箇の信の字を出でず。

従上若しくは仏、若しくは祖の、彼岸に超登して大法輪を転じ、接物利生するは皆此の一箇の信の字中より流出せずということ莫し。故に云う、信は是れ道元功德の母、信は是れ無上仏菩提、信は能く永く煩惱の本を断ず、信は能く速やかに解脱の門を証すと。昔善星比丘有り、仏に侍すること二十年、左右を離れざるも、蓋し謂う、此の一箇の信の字無く、聖道を成ぜず、生きながら泥犁に隕つと。

今日信翁居士、富貴の中に処すと雖も、能く是の如き決定の信を具す。昨に壬午の歳に於て山に登り見ゆることを求むるも、納れられずして回る。また次の年の冬に於て、直翁居士を拉て同に訪い、始めて門に入ることを得たり。今又一載を越えて糧を齎し糝を裹んで、特に來たつて相従い、毘尼を受けんことを乞い、弟子と為らんことを願う。故を以て連日其の端由を詰すに、的らかに篤く信じ、道に趣くの志有り。維摩經に云く、高原陸地に蓮華を生ぜず、卑濕淤泥に乃ち此の華を生ずとは、正に此れを謂うなり。

山僧是れに由つて之れを憚して、箇の省力修し易く曾て験す底の話を將つて両手に分付す。万法一に帰す、一何れの処に帰す。決して能く便ち恁麼に信じ去り、便ち恁麼に疑い去らば、須く知るべし、疑いは信を以て体と爲し悟りは疑いを以て用と爲すことを。信十分有れば疑い十分有り、疑い十分を得ば悟り十分を得ん。譬えば水漲れば船高く、泥多ければ仏大なるが如し。

西天此土・古今の知識、此の段の光明を発揚すること、只是の一箇の疑を決するにあらざる莫きのみ。千疑

万疑只是れ一疑、此の疑を決する者は更に余疑無し。既に余疑無くんば、即ち釈迦・弥勒・淨名・龐老と増さず減らず、二無く別無し、同一眼に見、同一耳に聞き、同一に受用し、同一に出没し、天堂地獄意に任せて逍遙し、虎穴魔宮、縦横無碍、騰騰任運・任運騰騰ならん。故に涅槃經に云く、生滅滅已・寂滅為樂と。須く知るべし、此の樂は妄念の遷注せし情識の樂に非ず、乃ち是れ眞淨無為の樂のみなることを。夫子の云く、夕に死すとも可なり、顔回其の樂を改めず、曾点舞詠して帰るとは、咸く此の無生真空の樂を佩ぶなり。苟も或いは疑わず信ぜずんば、饒い你坐して弥勒下生に到れども、也只箇の依草浮木の精靈・魂不散底の死漢と做り得るのみ。教中に言く、二乗の小果、八万劫の大定に入ると雖も、此の事を信ぜざれば聖を去ること逾遙かなりと、常に仏に訶せらる。

直に大信を發せんと欲せば、大疑を起こし、疑い來たり疑い去つて、一念万年・万年一念、的的遮の一着子の下落を見ることを要せんと欲せば、人と生死の冤讐を結び了るが如くに相似て、心憤憤地に即便ち一刀兩段を与えんと欲す。縦い造次顛沛の際に於ても、皆是れ猛利に鞭を著くるの時節なり。

若し疑わずして自ずから疑うに到らば、寤寐失すること無く、眼あれども盲の如く、耳有れども聾の如く、見聞の窠臼に墮せざるも、猶是れ能所未だ忘ぜず偷心未だ息まず。切に宜しく精進中に倍精進を加うべし。直に、行いて行くことを知らず、坐して坐することを知らず、東西并せず南北分かつたず、一法の情に當つべき有ることを見ず、箇の無孔の鉄槌の如くに相似たらしめば、能疑所疑・内心外境・双忘双泯、無無も亦無なり。遮裏に到つて举足下足の処、切に忌む、大海を踏翻し須弥を踢倒することを。折旋俯仰の時、達磨の眼睛を触瞎し、釈迦の鼻孔を磕破するを照顧せよ。其れ或いは未だ然らずんば、更に与に箇の注脚を添えん。僧趙州に問う、万法一に帰す、一何れの処にか帰す、州云く、我青州に在りて一領の布衫を作る、重きこと七斤。師云く、大小の趙州拖泥帶水、特に遮の僧の為に疑情を斬断すること能わざるのみにあらず、亦乃ち天下の衲僧を

賺して葛藤窠裏に死在せしむ。西峰は則ち然らず、今日忽ち人有つて、万法一に帰す、一何れの処にか帰すと問わば、只他に向かつて道わん、狗が熱油鏝を舐むと。信翁信翁、若し遮裏に向かつて担荷し得去らば、只遮の一箇の信の字も是れ眼中に屑を著く。」(三九丁表)

ここで師は、信翁居士の名に因んで、「一箇決定の信の字」の重要性から説き起し、「信十分有れば疑い十分有り、疑い十分を得ば悟り十分を得ん」と、信と疑との連関に言及し、「千疑万疑只是れ一疑、此の疑を決する者は更に余疑無し」と言明している。尤もこれは「理」の上ではそうであつても、やはり「事」の上では一疑を打破した後も更に体究練磨を継続すべきである事は、師の行状を見ても分かる通りである。なおここで師が、孔子・顔回・曾点の「楽」を「無生真空の楽」と称しているのは注目値する。儒教にも禅と同様の境涯が有る事を越格底の名僧が是認しているのである。

信翁居士と並んで旧参有力の居士であつた直翁居士の書に答えた法語も卓抜である。

「来書問いを置いて、皆是れ学人の工を用いる上の疑惑の処を弁論す。当に為に之を決して、晩学の初機をして趣向滞り無からしむべし。問う、平常心是れ道、無心是れ道。此の平常心・無心の語、多少の人を成却し、多少の人を誤却す。往往に泥中に刺有り笑裏に刀有ることを知らざる者は、何ぞ啗に棒を掉つて月を打ち、竹を接いで天を点すること有るのみならんや。古人の一言半句を答うるは、吹毛の利刃を揮うが如く、直に便ち人の命根を断ぜんことを要せんと欲す。若し是れ箇の皮下に血有る底ならば、直下に承当して更に擬議無からん。若し箇の痛痒を知らざる底に撞着せば、縦饒憍體地に徧くとも也星子の事を乾没せん。又石中に玉を蔵するが如し。識者は連城の壁有ることを知り、識らざる者は只一塊の頑石と作して之を視る。大抵古人立地の処を見んと要せば、語句上に向かつて著到すべからず。且く道え、既に語句上に在らざれば、畢竟甚れの処に在つてか著到す。若し遮裏に向かつて薦得せば、便ち此の事は修治を仮らざることを知らん。身の臂を使うが

如く、臂の拳を使うが如し。極めて是れ成現、極めて是れ省力。但信得及せば便ち是なり。何ぞ瞠眉豎目して模を做し様を打して箇の一字を看ることを待たん。儼し或いは然らずんば、古に云く、道うこと莫れ無心是れ道を云うと、無心も猶お一重の関を隔つと。何ぞ止に一重のみならん、更に須く百万重の在る有らんことを知るべし。苟も憤りを発し志を精進し、一段の死工夫を下さずんば、豈木石に之れ異なること有らんや。凡そ工夫を做して極則の処に到れば、必ず須く自然に無心三昧に入るべし。却つて前の無心と天地相遺なり。達磨の心牆壁の如しと云い、夫子の三月味を忘れ、顔回の終日愚の如く、賈島の推敲を取捨する、此等は即ち是れ無心の類なり。遮裏に到つて能拳所拳、能疑所疑、双忘双泯す。無無も亦無なり。香嚴の聞声、靈雲の見色、玄沙の壺襯指、長慶の捲簾、皆此の無心に由つて悟らずということ莫し。遮裏に到つて設し毫釐も悟りを待つ的心生じ、纖塵も精進の念起ること有らば、即ち是れ儻心未だ息まず能所未だ忘ぜざるなり。此の大病、悉く是れ道を障るの端なり。若し真空を契悟して親しく古人の地位に到らんと要せば、必ず須く真正に無心三昧に至つて始めて得べし。然も此の無心は汝が譬え頗る明らかなるも、吾復偈を以て之を証せん。遮箇を得ざれば、争か那箇を得ん。既に那箇を得ば、遮箇を忘却す。然も是の如くなりと雖も、更に須く道うを知るべし、遮箇那箇、総に是れ箇を偈ると。的的真底、嚙。咄。陽焰空華。」(四二丁表)

この法語は、学人の工夫上の疑惑に関して師の見解を述べたものである。「平常心是道」「無心是道」という古人の語脈裡に転却されて、分別的理解をする者が多い。だが古人が一言半句を下すのは「直に知解分別の根(命根)を断ぜんがため」であり、「菩提心のある活き活きとした漢ならば、古人の言うがままを我がものとして納得して受容し、あれこれ迷いはしない。」(箇皮下有血底、直下承当更無擬議)そして師は、発憤して道心堅固に精進をして更に一層の「死工夫」をし抜いた拳句に極処に到れば、「必ずや自然に無心三昧に入る事が出来るであろう」と続けている。師がここで言う「死工夫」とは「分別を絶した鈍工夫」ということであろう。工夫が既

に計らいを空じているが故に、思わず知らずに自然に「無心三昧」に入ることができるのである。師は、この真箇の「無心三昧」たるや、先の分別底の「無心」とは天地懸隔であると注意を促している。

興味深いのは、師が「能拳所拳、能疑所疑、双忘双泯した」この真の無心の実例として、達磨大師の「心牆壁の如し」と、孔子が齊の国で韶樂を聞いて感動して「三月肉の味を知らず」という事実（『論語』述而第七）と、顔回が孔子の言われた事に対して「終日違わざること愚なるが如し」であつたということ（為政第二）と、賈島が「僧推月下門」の「推」という字を「敲」に変えるべきがどうかで韓愈の行列に衝突してしまう程に「推敲」に夢になったこと等を列挙しているということである。これは師が、「禪」や「仏法」を根本経験の方から捉えているがためであると思われる。外面からでしか「禪」を理解できない人は、儒教にも禪に通ずる境地が有るということを言い難いであろう。

そして師は古人の大悟がいずれもこの「無心」に由らないものはないことを強調している。ただそれに加えて、師は「その場合に、もし悟りを待つ心が生じたり、聊かでも精進の念が起ることがあれば、外に向かつて求める心が未だ止まず、主客の差別を忘れておらぬということになる。この病こそ大道の体得を遮る端緒となるものである。もし真空を悟つて古人の境涯に到ろうと思うならば、必ず真に無心三昧に到つて初めて可能となる。」と論じている。師がこの法語の末尾に置いた「陽焰空華」という一句は、まさに「真空」の実践であり、「坐水月道場、修空華万行」の謂であろう。

最後に、公案参究の弊害に関して、語録の「補遺」の箇所では師が特に喚起を促していることをご紹介しておきたい。

「往往に学道の士、出家の本志を忘却して一向に邪に随い悪を逐うて正悟を求めず、妄りに仏祖の機縁・古人の公案を將つて頭従り穿鑿して遽に相伝授し、密密に珍藏して、以て極則と為す。便乃ち毘尼を守らず因果

を撥無し、人我いよいよそうこう崢嶸たるを見、三毒まますしじょう倍熾盛を加う。斯かくの如きの輩、魔外まげに墮し、永く他家の眷属なと作ることを免れず。若し未だ邪謬たといに遇わず、初心に背かざることと有らば、当まさに無常迅速を念じ、痛く苦海沈淪を思うべし。…(中略)…設使たとい機縁偶あわず工夫未だ充たざるも、切に須く命を捨て形を忘じて勤行苦行し、死して生を拵ずつるに至るまで、一心も退かざるべし。』(六五丁表)

これはその当時の禪の修行者達が、(指導者も含めて)往々に上求菩提・下化衆生という「出家の本志」を忘却して真実の悟りを求めず、古則公案を頭で穿鑿した「調べ」を師から弟子へと伝授し密かに珍藏して、それこそが「極則」であるかのように主張している。だが、肝心の大死一番・絶後再蘇を経て自性を徹見していないので、人我や三毒が益々猛威を振るうというのである。師がここで強調しているのは、公案参究は何よりも実参実悟でなければならないということであろう。公案禪に於ける斯かる弊害に関しては、わが国に於ては黄檗宗の潮音道海禪師の批判が有名であるが、高峰禪師が大法を挙揚された中国の元代初めにあつても、既にこの種の弊害が顕著であつたというのは驚きの他はない。

まとめ

以上述べてきた如く、高峰原妙禪師が自らの真摯な求道体験に基づいて挙揚された「公案工夫」とは、先ず最初に、明眼の禪匠を見つけ、次ぎに、その教導をそのまま素直に「真受け」し、大死一番して自性を見徹するまで、「大信根・大憤志・大疑情」を具備して決死の覚悟で間断無く公案を工夫する、ということである。その際、工夫は足実地を踏んだ実参実究でなければならず、仮初にも頭で公案を捌さばいて事足れりとするような事があつてはならない。たとい機縁契あわず工夫純熟しなくとも、死に至るまで不退転の工夫を継続すべしと、師

は強調しておられる。わが国では、五百年間出の白隠禪師が公案禪を集大成されてから既に長い年月が経過し、高峰禪師の指摘された公案禪の弊害が散見されるようになっていく。この時に当り、真正の工夫を挙揚された高峰禪師の行履とご垂誠を顧みることはいかに意味のあることのように思われるのである。

（最後に、この「覚書」の作成に際しては、元代禪宗史をご専門にしておられる野口善敬師より、格別のご教示を賜りました。衷心より篤くお礼申し上げます。）

【執筆者プロフィール】

吉田公平

一九四二年宮城県生まれ。東北大学大学院博士課程後期中退。東洋大学文学部教授。東洋大学東洋学研究所所長。文学博士（広島大学）

鈴木重喜

一九六二年愛知県生まれ。愛知学院大学大学院博士課程単位取得。正眼短期大学・人間学科教授。

長谷川昌弘

一九五六年愛知県生まれ。愛知学院大学大学院博士課程単位取得。愛知県光陽寺住職。浙江大学客員研究員

木村俊彦

一九四〇年京都府生まれ。東北大学大学院博士課程修了。京都府養徳院先副住職。四天王寺国際仏教大学教授。仏教学科長。文学博士（東北大学）

田中寛洲

一九四八年大阪府生まれ。京都大学大学院博士課程修了。坐禅会「一空会」師家。室号傳芳庵。

並木優記

一九五〇年東京都生まれ。学習院大学大学院博士課程単位取得。東京都金龍寺住職。妙心寺派教化センター教学研究委員。

朝山一玄

一九五九年島根県生まれ。早稲田大学大学院博士課程単位取得。島根県観音寺住職。妙心寺派教化センター教学研究委員。花園大学非常勤講師。

野口善敬

一九五四年福岡県生まれ。九州大学大学院博士課程中退。福岡県長性寺住職。妙心寺派教化センター教学研究委員。福岡女子大学非常勤講師。東洋大学東洋学研究所客員研究員。博士（文学・東洋大学）

徳重寛道

一九六六年北海道生まれ。北海道大学大学院修士課程修了。北海道明心寺住職。妙心寺派教化センター教学研究委員。

廣田宗玄

一九六七年兵庫県生まれ。花園大学大学院博士課程修了。兵庫県順心寺副住職。妙心寺派教化センター教学研究委員。花園大学非常勤講師。博士（文学・花園大学）

矢多弘範

一九七〇年大分県生まれ。東洋大学卒業。大分県曹源寺住職。妙心寺派教化センター教学研究委員。

【編集後記】

妙心寺派において教学関連の諸機構が整備される中、派内僧侶や関係者による学術研究の成果を発表する場を設けることを求める声が高まってきたのを受けて、平成十五年、『妙心寺派教学研究紀要』が創刊された。派内僧侶に研究論文の投稿を呼びかけるのに加え、禅関係の研究者にも寄稿を依頼して発刊を続け、今年もここに第四号を送り出すことになった。

本号において、吉田公平氏は『盤珪の不生禅と王陽明の良知心学』と題して、広義の心学を立脚点にして盤珪禅について考察された。鈴木重喜氏は『正眼寺開山無相大師四百五十年遠譚法要について』と題して、正眼寺で行われた無相大師関山慧玄の四百五十年法要について、正眼寺所蔵文書から考察された。長谷川昌弘氏は『靈源惟清と墨跡』と題して、禅僧の書跡である「墨跡」の源流について詳しく分析された。木村俊彦氏には、第二号、第三号に続いて貴重な資料を紹介していただいた。田中寛洲氏には、『高峰原妙禅師の公案工夫』と題し、『高峰大師語録』に基いて禅師の公案工夫について明らかにしていただいた。『紀要』のために玉稿を賜った諸氏に対し、心からの感謝を申し上げます。

毎号貴重な研究成果を掲載して『研究紀要』も順調に発刊を続けているが、派内の学僧からの投稿が少なく、物足りなさを感じている。臨済宗を中心とした禅宗に関するテーマに限らず、宗学に資すると認められる研究も広く受け入れているので、積極的な投稿を期待したい。

なお、四月発刊の予定が諸事情で遅れてしまい、寄稿者の方々をはじめ多数の皆様にご迷惑をおかけしたことを深くお詫び申し上げます。

（朝山一玄 記）

【『臨濟宗妙心寺派教学研究紀要』論文執筆要項】

《テーマ》

臨濟宗を中心とした禪宗に関するもの。

（ただし、仏教全般に互る内容で、宗学に資すると思われるものについては、これを認める。）

《枚数》

原稿用紙四十枚程度（注を含む）

《書式》

・本文は日本語とする。

・縦書きを原則とする。（サンスクリット等の資料を中心とした論文の場合は、横書きも認める。）

・本文・資料共に漢字は原則として当用漢字を用いる。

・資料として書き下し文を用いる場合、仮名遣いは新旧任意とする。

・資料を口語訳した場合には必ず原文を付す。

・ワープロの場合は、打ち出し原稿とテキストファイルのフロッピーを提出のこと。

《応募先》

〒六一六―八〇三五 京都市右京区花園妙心寺町六四

妙心寺派宗務本所 教化センター TEL〇七五―四六三―三二二（代）

※封筒の表に「紀要原稿在中」と明記のこと。

《締め切り》

毎年十二月末日（厳守）

《発刊》

翌年四月（予定）

臨濟宗妙心寺派教学研究紀要 第四号

平成十八年 七月一日 発行

発行人 細川 景一

編集 妙心寺派宗務本所教化センター

印刷所 信天堂

発行所 妙心寺派宗務本所教化センター

〒六二六-八〇三五

京都市右京区花園妙心寺町六十四

電話（〇七五）四六三—三二二一

ISSN 1348-3455